台大日本語文研究第 45 期
2023 年 06 月，頁 25-43
2023-03-29 收稿，2023-05-22 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 202306_(45).0002

日本文學研究融入 SDGs 之視點，以探究多和田葉子小說《太陽諸島》

曾秋桂*

摘要

21 世紀的世界公民地重要課題之一為 SDGs（Sustainable Development Goals 永續發展目標）。本人思索日本文學研究如何與 SDGs 結合，發揮文學力量，於是關注了世界知名的越境作家多和田葉子《在地球各角落發光發亮》（2018）、《來自星星的訊息》（2020）、《太陽諸島》（2022）三部曲作品。本論文參酌先前的 2 部作品的研究成果，主要以第 3 部《太陽諸島》（2022）為考察對象。

經過濾《太陽諸島》中描繪之重點事例，分析並考察其意義，可以彙整出以下三点的結論。首先是彰顯出選定波羅地海船行航路的用意，是在於歷經長途旅程後「回歸初衷」的訊息。其次是《太陽諸島》書名，意謂著太陽所遍照全球各地是個不分族群的統體世界。又從《太陽諸島》所提及環境保護、性別等議題看來，整篇《太陽諸島》反映出 17 個 SDGs 目標中，除了 SDGs13 之外的 16 個目標。

如此從永續發展的社會意識而論，多和田葉子透過文學作品將 SDGs 議題融入其中，並充分發揮出文學力量，可謂名符其實的世界知名作家。

關鍵詞：SDGs、多和田葉子、《太陽諸島》、日本文學研究、文學力量

臺灣大學學術期刊資料庫

* 淡江大學日本語文學系教授

A Study Japanese Literature Towards SDGs: Focusing Yoko Tawada "*Taiyō Shotō*"

Tseng Chiu Kuei*

Abstract

One of the essential challenges for global citizens in the 21st century is to advance the motion of Sustainable Development Goals (SDGs). In this context, it is conceivable that research on Japanese literature may contribute to these goals. Following my studies on the first two works "Scattered All Over the Earth" (2018) and "*Hoshi ni Honomekasarete*" (2020), I have selected "*Taiyō Shotō*", literally “The Archipelago of Sun”, the third work in Yoko Tawada's trilogy, as a subject of study, as the author has a considerable reputation as a transboundary writer with her other works,.

Upon analyzing and reflecting on the events depicted in " *Taiyō Shotō*," I conclude that three main points stand out. First, by choosing the Baltic Sea route, the author conveys the message of returning to one's original self after a long journey. Second, the title " *Taiyō Shotō* " connotes the integration of all areas of the planet illuminated by the sun into a unified whole. Finally, the themes of environmental protection and gender portrayed in the work enable us to infer that all the 16 SDGs goals, with the exception of SDG 13, are vividly portrayed in the novel. It is noteworthy that Yoko Tawada has showcased her ability to leverage the genre of Japanese literature to address the challenges posed by the SDGs and emerged as a globally renowned writer who embodies the power of literature.

臺灣大學學術期刊資料庫

* Professor, Department of Japanese Language and Literature, Tamkang University

Key words: Sustainable Development Goals (SDGs), Yoko Tawada, *Taiyō Shotō*, Japanese Literature Studies, The Power of Literature

臺灣大學學術期刊資料庫

多和田葉子『太陽諸島』の一考察
—SDGs に向けた日本文学研究を視座に—

曾秋桂*

要旨

21 世紀の世界的市民が重要な課題の一つに、SDGs（Sustainable Development Goals 持続可能な開発目標、エスディージーズ）がある。日本文学研究が SDGs に関わり合い、貢献しうるかと思い、越境作家として世界的に著名な多和田葉子の三部作『地球にちりばめられて』（2018）、『星に仄めかされて』（2020）の地続きとして、今回、3 作目の『太陽諸島』（2022）を研究対象に取り扱うことにした。

『太陽諸島』に描かれた事象をピックアップし、その真意を分析、考察したところ、結論を下記の 3 点に纏めることができる。まずは、バルト海航路を選んだことに初心の「元の自分に戻る」というメッセージが隠されていることである。次は、書名『太陽諸島』からは、太陽が照らす地球の至る所を一つのまとまりに統合することである。最後は、『太陽諸島』に描かれた環境保護、ジェンダーなどの議題からは、SDGs の 17 ゴールのうち、SDGs13 以外の 16 ゴールのすべてが『太陽諸島』に色濃く描写されていると分かった。

このように、日本文学研究を通して明らかににした、持続可能な社会への意識を文学作品に盛り込んだ特色を見ると、多和田葉子が SDGs の課題を日本文学のジャンルを通して文学の力を発揮しえた、名実共な世界的作家だと言えよう。

キーワード：SDGs、多和田葉子、『太陽諸島』、日本文学研究、
文学の力

臺灣大學學術期刊資料庫

* 淡江大学日本語学科教授

多和田葉子『太陽諸島』の一考察
—SDGs に向けた日本文学研究を視座に—

曾秋桂

一、はじめに

21 世紀の世界的市民が重要な課題の一つに、SDGs（Sustainable Development Goals 持続可能な開発目標、エスディージーズ）がある。周知のように、SDGs は 2015 年 9 月の国連サミットで採択されたもので、国連加盟 193 か国が 2016 年から 2030 年の 15 年間で達成するために掲げた目標である[1]。日本では、平成 28 年（2016）5 月 20 日に内閣総理大臣を本部長として、SDGs 推進本部を設置することになった[2]。2030 年までに「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会[3]を実現させるため、SDGs（17 ゴール[4]、169 ターゲット、230 指標）について、未来を担う世界的市民の若者と共に考えることが大事である。ちなみに、2022 年の SDGs 達成ランキングトップ 5 は、フィンランド、デンマーク、スウェーデン、ノルウェー、オーストリアで、日本は 19 位[5]だそうである。

そこで、「誰一人取り残さない」社会を実現させる信念に基づき、日本文学研究がそれに関わり合い、貢献しうるかと思い、越境作家として世界的に著名な多和田葉子の三部作[6]『地球にちりばめられて』

---

1 https://imacocollabo.or.jp/about-sdgs/（2022 年 10 月 1 日閲覧）
2 https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sdgs/pdf/konkyo.pdf（2022 年 10 月 1 日閲覧）
3 https://miraimedia.asahi.com/sdgs-description/（2022 年 10 月 1 日閲覧）
4 https://imacocollabo.or.jp/about-sdgs/17goals/（2022 年 10 月 1 日閲覧）17 ゴールは下記の通りである。SDGs1：貧困をなくそう、SDGs2:飢餓をゼロに、SDGs3：すべての人に健康と福祉を、SDGs4：質の高い教育をみんなに、SDGs5：ジェンダー平等を実現しよう、SDGs6：安全な水とトイレを世界中に、SDGs7：エネルギーをみんなに そしてクリーンに、SDGs8：働きがいも経済成長も、SDGs9：産業と技術革新の基盤をつくろう、SDGs10：人や国の不平等をなくそう、SDGs11：住み続けられるまちづくりを、SDGs12：つくる責任つかう責任、SDGs13：気候変動に具体的な対策を、SDGs14：海の豊かさを守ろう、SDGs15：陸の豊かさを守ろう、SDGs16：平和と公正をすべての人に、SDGs17：パートナーシップで目標を達成しよう。
5 https://miraimedia.asahi.com/sdgs-description/（2022 年 10 月 1 日閲覧）
6 多和田葉子・野崎歓（2022.1）「群像創刊 75 周年特別対談地球にちりばめられた私たち」『群像』77 巻 p.173 では、「三部作であるとはどこにも書いていないんですよね」の聞き手野崎歓の質問に対して、「書いていないと思いま

[7]（2018）、『星に仄めかされて』（2020）に次ぐ最終篇の『太陽諸島』（2022）に注目することにした。というのは、嘗て SDGs 目標を反映するグローバル時代のエコフェミニズム[8]の視点から前 2 作『地球にちりばめられて』[9]（2018）、『星に仄めかされて』（2020）を試みた成果があり、その地続きとして SDGs に向けた日本文学研究の一考察として、前 2 作の研究成果を参考にしながら、『太陽諸島』を研究対象に取り扱いたいからである。

二、第 3 作の『太陽諸島』について

前 2 作の研究成果[10]に触れながら、『太陽諸島』の詳細を中心に見てみよう。

す。私としては、全部で何部作になるかわからないで書き始めましたし、今（2021 年 11 月 2 日の時点・論者注）も分かっていないかもしれません」と多和田葉子が答えた。とは言え、三部作の言い方は、現在でほぼ定説となっている。2021 年 11 月より早い時点では、論者が作品に関する不明な所を多和田葉子に聞いたところ、『地球にちりばめられて』の続きがあると多和田葉子本人から直接に伺った。また、週刊読書人ウェブ多和田葉子（作家）郷原佳以（東京大学准教授）（2019 年 5 月 18 第 3239 号「多和田葉子氏インタビュー沼のなかから咲く蓮の花のように」（第 2 回 Hiruko は流れ続ける運命）https://dokushojin.com/article.html?i=3319&p=3　2021 年 1 月 15 日閲覧）では多和田葉子も連作を認めている。さらに、栩木伸明は「今作（『星に仄めかされて』のこと・論者注）は『地球にちりばめられて』の続編である。（中略）すでに第三作の執筆が予告されているので、とても楽しみである」と、『星に仄めかされて』が出来た時点では、「三部作」の構想が定着されたと言えよう。https://www.bookbang.jp/review/article/633645（2020 年 10 月 10 日閲覧）。

[7] 谷口幸代（2022）「多和田葉子前作品解題」『群像』76 巻 p.220 講談社では、「長編連作小説の第一部」と見ている。

[8] 多和田葉子・小澤英実（2023）「歴史の詰まった海、喚起された記憶『太陽諸島』多和田葉子インタビュー」『群像』78 巻 p.110 講談社では小澤英実が「『太陽諸島』一作がフェミニズムの思想につながっていったんです」と示している。

[9] 松永美恵（2023）「書評「国境なき船旅、幻の故郷と饒舌な旅人たち」」『群像』78 巻 p.123 講談社では、「この三部作の第一部『地球にちりばめられて』は、つい先ごろ全米図書賞翻訳部門で、多和田作品としては二度目のショートリストを果たした。多様なルーツを持つ人々の国アメリカで、大きな共感を呼んだ証でもある。多和田はすでに『献灯使』でこの賞を受賞しており、第一作家、同一翻訳家（満谷マーガレット）の組み合わせで二度のノミネートは画期的なことだ」と褒め称えている。

[10] 曾秋桂（2020）「グローバル時代のエコフェミニズムの視点から読む多和田葉子『地球にちりばめられて』—国境無き新しい夢を育むことへの示唆—」『台大日本語文研究』三十九期 pp.27-48 台湾大學日本語文學系、曾秋桂（2021）「エコフェミニズムの視点から読む多和田葉子の『星に仄めかされて』—「神の子どもたちはみんな踊る」の意味をめぐって—」『台大日本語文研究』四十一期 pp.21-40 台湾大學日本語文學系

（一）作品の構成と粗筋

『太陽諸島』は前2作と同じく10章によって構成され、同じく重要登場人物の、Hiruko（第一、五、七、十章、日本人）、クヌート（第二、八章、デンマーク人）、アカッシュ（第三章、インド人）、ノラ（第四章、ドイツ人）、ナヌーク（第六章、デンマーク人）、Susanoo（第九九章、日本人）の6人が交互に語った作品である。第2作では主役同様の Susanoo と、Susanoo を兄貴と見ているムンンの二人が前景化された代わりに、第1作の主役 Hiruko、クヌートが後景化された[11]。第3作になると、Hiruko[12]とクヌートが再び前景化されるようになった。

第3作の冒頭では、第2作の結末に続き、滅びたと言われた Hiruko の国を探すために、バトル海をめぐる「東の風」という典型的な客船ではない船[13]に乗っている所から始まった。「ディナー・パーティ招待券」（p.330）をもらったベルマー医師などの3名が現地に留まり、前2作と同じく重要な登場人物 Hiruko、Susanoo、クヌート、ナヌーク、ノラ、アカッシュの6名に、航海中、案内人ターフェルや国旗のハンカチを持つ男ヴィトルドなどの多くの人物が加わった。この6名の重要な登場人物が停泊したドイツのリューゲン島、ポーランドのシュチェチン、グダニスク、ロシアのカリーニングラード、ラトビアのリガ、エストニアのタリンを見学した後、サンクトペテルブルクから「ここからシベリア鉄道に乗れば、大陸の東の果てに

---

11 曾秋桂（2021）「エコフェミニズムの視点から読む多和田葉子の『星に仄めかされて』—「神の子どもたちはみんな踊る」の意味をめぐって—」『台大日本語文研究』四十一期 pp.21-40 台湾大學日本語文學系

12 松永美恵（2023）「書評「国境なき船旅、幻の故郷と饒舌な旅人たち」」『群像』78巻 p.121 講談社では、「第三部では十ある章のうち、Hiruko が語り手の章が四つもあり、ここに至ってポリフォニーのなかで彼女の声が際立つのも事実だ（第一部では十章のうち三つ、第二部では十章のうち一つだけが Hiruko）の章だった）」と同じ見解を示している。

13 「民営の運送会社が北欧と東欧の間の貿易を一で利益を上げながら、かつて活躍したバルト海の郵便船の雰囲気を味わってもらうという売り込みで少数の観光客を乗せている」（p.P29）とある。なお、多和田葉子・小澤英実（2023）「歴史の詰まった海、喚起された記憶『太陽諸島』多和田葉子インタビュー」『群像』78巻 p.113 講談社では、多和田葉子が「それ（郵便船のこと、論者注）と普通の旅客船のイメージを足して二で割ったフィクションが『太陽諸島』に出てくる船です」と説明している。

着く。そしてそこからHirukoの故郷であるニイガタまでは漁船のような小さな船でも渡る」（p.226）予定だったが、全員がロシア入国ビザを持っていないため、サンクトペテルブルクへの上陸を許されず、船に乗ったまま、次の逗留地のフィンランドへのヘルシンキへ向かわざるを得ないところで作品の終盤を迎えている。結局滅びたかもしれないHirukoの国が火山噴火で出来上がった「ニシノシマ」（p.313）、あるいはゴミで出来た「ゴミの島」（p.314）となり、Hirukoの国の人々が「そのゴミの島に移住」（p.P314）していると書物[14]で伝えられているそうである。そうだとすると、新天地で新しい生活を始めるHirukoの国の人々が「SDGs11：住み続けられるまちづくりを」を目指して[15]、「新しい人生を始める」（p.315）と見なしてもよい。ちなみに、本作品で移動する地理的空間が2022年のSDGs達成ランキングトップ5のうち、フィンランド、デンマーク、スウェーデンのトップ3にも及んでいる[16]。

（二）視点人物と主題の移り変わり

第1作の作品空間をヨーロッパに限らず、アジア、アフリカ、アメリカ、カナダ、インドなどの広地域に設定した。その上、「地球文化」（p.40）、「地球人」（p.41）、「地球」（p.44）、「僕らはみんな、一つのボールの上で暮らしている」（p.116）のように、地球で暮らしている人類を一つの単位に見る地球人の世界観が伺われる。第2作では、「遠い国から来たSusanooやHirukoが俺と顔が似ていたりするのも

14 「書物という門をくぐればどんな国にもビザなしで入国できる。もう存在しない国にも入国できる。古代ローマ帝国でもソビエト連邦でも」（p.309）の記述をしいて言えば、「SDGs4：質の高い教育をみんなに」に入れて考えてもよかろう。

15 ノラが「ゴミの島はこの世の天国かもしれない。ゴミからエネルギーを得ることができるから、原発も石炭もいらない。ゴミを材料にして自動車や冷蔵庫をつくることができる。天然資源を輸入する必要がないから、他の国に依存する必要もない。付き合ってもどうせ喧嘩になるだけなら、初めから付き合わない方がいいということで、まわりの国々と関係を絶ってしまった。そういうことって、ありうるんじゃない？」（p.325）と説明した箇所から伺われる。

16 これは、多和田葉子・小澤英実（2023）「歴史の詰まった海、喚起された記憶『太陽諸島』多和田葉子インタビュー」『群像』78巻 p.116 講談社では、多和田葉子が言った「この三部作は、やっぱりヨーロッパの物語です。東へ向かう旅は、ヨーロッパとは何かを問う旅でもあります」と髣髴させる。

地球に連続性があるからだ」（p.116）と言ったナヌークの言葉、「それは同じ地球人だから気にするさ」（p.305）と言ったアカッシュの言葉などからは、第2作にも地球人の世界観が底流していることが分かった。第3作では、題名「太陽諸島」と取り上げた各国の国旗が同じく太陽が照らす地球の至る所を強調し、国籍[17]・祖国[18]の無用論と「お国自慢病」[19]の治癒が加わり、地球を一つのまとまりにした考え方[20]が顕著である。また、前2作で触れた「難民問題」、「言語問題」、「高度技術・文明を持つ日本国の消滅」、「環境保護」、「再生可能なエネルギー」を受け継ぎ、第3作にも「フェアトレードの「緑のボタン」と呼ばれる公認ラベル」（p.108）、「第三世界に寄付する服を入れるハートマークの付いたコンテナ」（p.109）、「不法な琥珀採取」（p.190）などの環境保護の議題が見られる。要するに、地球で暮らす地球人と環境保護との主題が、確かに三部作で繋がっていると言えよう。とはいえ、主題を細部的に見てみると、主題の展開が微妙にずれている部分も確かである。例えば、第1作ではグローバル時代において地球の人類が直面すべき総括的なエコフェミニズムの課題と比べると、第2作では、視点人物に当てた焦点がより内面化されており、心的問題が描写されている[21]。そして第3作では、また第1作と同じように、地球の人類の直面すべき総括的な課題が

---

17 「国は書類上の約束事に過ぎない。つまり紙でできている」（p.77）とヴィトルドが言った言葉がある。

18 車の運転手が言った「人間などというものは抽象的で信じられない。祖国こそ、心が感じることができるものだ」（p.155）と、Hirukoが言った「祖国が正しくてまわりの国は敵だと考え続けていると、ある日、祖国が溶解し、消滅してしまう」（p.156）記述がある。

19 「そうでしょう。国内にずっと閉じこもっていると、まわりの人たちがみんなお国自慢話に満足して、誰も疑いを持たないから、どんどんその雰囲気に染まっていく。でもアルゼンチンの人たちにとってはポーランドのどこがすごいかなんて、どうでもいい話ですからね。外国人に囲まれて暮らしていれば、お国自慢病が治ってきます。だからアルゼンチンに住もうと思ったんです」（pp.92-93）とヴィトルドが言った言葉がある。

20 岩川ありさ（2023）「多和田葉子「太陽諸島」聴かれなかった歴史」『文學界』1月号 p.311 文藝秋春では、岩川ありさ「近年になって多和田の小説は、ますます、地球という視座から、人間中心の世界を問いなおすようになっている」と、同じような見解を示している。

21 曾秋桂（2021）「エコフェミニズムの視点から読む多和田葉子の『星に仄めかされて』―「神の子どもたちはみんな踊る」の意味をめぐって―」『台大日本語文研究』四十一期 pp.21-40 台湾大學日本語文學系

提起されている。

三、『太陽諸島』に描かれた諸事象の真意

次に『太陽諸島』に描かれた5点の事象をピックアップし、その真意を分析、考察しよう。

（一）バルト海航路を選んだことの意味—「元の自分に戻る」主題の焦点化—

観光案内人ターフェルが言った「地中海に出てスエズ運河を通って東に出るというイスラム原油主義的な航路」（p.56）、「アフリカを大きな網で鯨のように捕らえて脂ぎった利益を搾り取ろうという、新帝国主義的な航路」（p.56）、「袋小路と呼ばれるバルト海に入り込んでいく。これこそ未来につながる航路」（p.56）の三つのうち、Hiruko一行がバルト海航路を選んだことを観光案内人ターフェルに「賢い選択」（p.56）だと褒められた。しかし、「僕らはバルト海に入ろうとしている。この理不尽な航路は本当に僕ら自身が自由意志で選択しているものだったのだろうか」（p.57）のように、クヌートは確信できなかった。それでは、確信できなかったのに、なぜ敢えてバルト海航路を選んだか、その理由をここで考えてみよう。

バルト海を囲む国に「デンマーク、ドイツ、ポーランド、リトアニア、ラトビア、エストニア、ロシア、フィンランド、スウェーデン」（p.21）がある。ナヌークがバルト海の話題を持ち出した時に、ノラが「あなた（ナヌーク・論者注）がきっと大きな水のまわりを一周して元の自分に戻るのね」（p.22、下線部分は論者による。以下同様）と言った言葉が、最初の出発点に再び戻ってくるという結末を伏線として読み取れる。人間に譬えてみれば、世に生を受けた人間の出発点と言えば、子宮のことが思い出されよう。まさに「バルト海の形を思い出して。サンクトペテルブルクを過ぎれば、次はフィンランド。西側世界に戻ってしまう」（p.282）とHirukoが言ったように、「池のように閉じた水に感じられる」（p.189）バルト海が形として子宮にも似ていると想像できよう。さらに「バルト海はい

臺灣大學學術期刊資料庫

ろいろな性格を持つ人たちの魂が集まってくる魔法円みたいなものだ」（p.21）とナヌークが言ったことを証左として挙げられよう。また、Hirukoが船室について、「わたしたちは胎児だった頃、自分のいる子宮が地球のどのへんにあるのかなどもちろん考えてもみなかった。（中略）胎児にとっては地球も月も同じだろう。どこであっても、そこがこの世に存在し始めた時間、一番守られていた場所なのだ。胎児は羊水に浮いている。狭い船室ほどその時と似た安心感を与えてくれる空間があるだろうか」（p.29）と述べた感想からは、バルト海に浮かぶ船室が胎児の羊水に浮かぶ子宮と空間的に似た安心感を与えられる場所である。一方、第九章でロシア入国を望むなら、「移住登録をしている国へ戻って、そこでビザを取って出直してきてください」（p.283）と船長ドゥーフに言われた。その時にクヌートが「僕たちは本当にシベリア鉄道に乗るつもりだったんだろうか。それともそんなことは無理だと初めから悟っていたのに、見て見ぬふりをしていたんだろうか」（p.297）と反省している。バルト海航路を選んでも、所詮最終的に目的地に到達することが不可能だということを最初から暗示されたと言ってもよかろう。それにも関わらず、バルト海航路を選んだことは、多和田葉子が言った「小さい海ですが、ヨーロッパの冷戦時代の歴史ががたくさん詰まっているからです。（中略）元に戻ってしまい目的地に到着しない動きでもあります」[22]意図に符合し、「元の自分に戻る」の主題を焦点化させるにほかならない。

（二）書名『太陽諸島』の意味—地球にちりばめられた大陸と島を一つのまとまりに統合—

まず、題名にある「諸島」から考えてみよう。「島はいつも国家紛争の原因になるのだから」（p.44）とノラが言った言葉に触発され、ナヌークが「俺はホッカイドウという島があったことを知っている。その島もかつてはどの国の所有物でもなく、いろいろな民族が住ん

臺灣大學學術期刊資料庫

22 多和田葉子・小澤英実（2023）「歴史の詰まった海、喚起された記憶『太陽諸島』多和田葉子インタビュー」『群像』78 巻 p.109 講談社

でいた。サハリンもそうだ。ホッカイドウやサハリンから見たら本州は島ではなく大陸みたいなものだろう。つまり大陸とか島とか相対的な話じゃないかということだ」（p.47）と、「大陸」と「島」の呼び方があくまでも相対的な見方に過ぎず、どちらの呼び名でも呼べると主張したこの見解が語り手のクヌートとの間で偶然に一致している。太陽が纏わる相対化された島々、いわば「太陽諸島」と呼んでもよい。作品に取り上げた国旗のことは、大抵太陽に纏わるものばかりである。それはグリーンランド国旗、日本の「日の丸」の国旗、アルゼンチンの国旗、インドの国旗である。「真ん中にある赤い太陽の下半分を白くして、白い背景の下半分を赤くすれば、グリーンランドの旗」（p.54）については、クヌートが「太陽はおそらく石器時代から現代まで国や宗教に関係なく人間が気にしてきた恒星であり、実際、太陽がなければそもそも僕らは存在しない。その太陽が氷の大地から昇り、氷の大地に沈む土地で生きることを主張するようなグリーンランドの旗は賢いし、現代的だと思う」（pp.54-55）。同時に「グリーンランドの旗が Hiruko の国の旗のパロディであることに初めて気がついた。（中略）グリーンランドの旗は、どう見ても日の丸をいじって遊んだ結果できたとしか思えない」（p.54）とクヌートに言われた日の丸の日本の国旗は、「赤い日の丸は日の出の太陽を象徴する」[23]そうである。「上三分の一が帯状の空の青、下三分の一がやはり帯状の海の青で、真ん中の白い部分に太陽が浮かんでいる」（p.65）というアルゼンチンの国旗に対して、インドの国旗が「上三分の一がサフラン色、下三分の一が緑色で、真ん中の白い部分にやはりまるい物体が浮かんでいる（p.65）とある。そのまるい物体とは、「アショカ王の法輪」（p.93）だそうである。一方、アカッシュが叔父の家で見た国旗の真ん中に、「法輪ではなくて糸車」（p.94）である。それは、インドのカンジンの「自分で糸車をまわして、自

[23] https://www.weblio.jp/content/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E3%81%AE%E5%9B%BD%E6%97%97（2022 年 10 月 1 日閲覧）「日本では聖徳太子が遣隋使に託した文書以来、自国を”日出ずる国”とする考え方があり、赤い日の丸は日の出の太陽を象徴する」とある。

分の着るものは自分でつくるという精神がなければ独立できない」（p.94）という独立理念が反映している。「十九世紀からずっと積もり積もって凝縮された苦しみが宿っている」（p.107）木綿の例で分かりやすく説明しよう。ノラが「イギリスはインドから安く綿を買い上げて、繊維工業で豊かになっていったけれど、インド綿畑で働く人たちは貧しいまま繊維工業が発達しなかった」（p.95）と鋭く指摘したこと、また、「インドで糸になった綿糸は中国で染色されて、バングラデシュで服になる。綿を摘んでいる子供たち、ミシンに向かって日夜働いている子供たち」（p.96）とアカッシュが代弁したことは、いずれ発展途上国の土地にある豊かな資源を剥奪する仕組みを露わにさせてしまう。この辺りの記述を総じて言えば、「SDGs1：貧困をなくそう」、「SDGs2:飢餓をゼロに、」、「SDGs8：働きがいも経済成長も」、「SDGs10：人や国の不平等をなくそう」、「SDGs12：つくる責任つかう責任」の諸問題が問われるように見て取れる。この諸問題も、ここ数年ナイキやGAPでも綿製品が100%オーガニックコットンで製造する政策を取ることを髣髴とさせよう。要するに、国旗によく纏わっている太陽と島々2点を考えると、島々で出来上がった地球を一つのまとまりに統合することが、「SDGs10：人や国の不平等をなくそう」、「SDGs16：平和と公正をすべての人に」、「SDGs17：パートナーシップで目標を達成しよう」の目標と相通じているものがあるのではないか。

（三）環境保護論とその落とし穴

作品中、環境保護を支持する言説を出す一方、その環境保護論に落とし穴がある部分も指摘されている。

1. 忠実な環境保護支持者のノラ

三部作を貫いて環境保護論者として登場しているノラ[24]が、「熱狂的なフェアトレード信奉者」（p.190）と言われても反論しない。日

[24] 多和田葉子・小澤英実（2023）「歴史の詰まった海、喚起された記憶『太陽諸島』多和田葉子インタビュー」『群像』78巻 p.116 講談社では、ノラの環境保護に示した高い関心について、多和田葉子が「ドイツの主流な考え方」と説明している。

東京大学国語国文学会紀要資料庫

頃、「フェアトレードの「緑のボタン」と呼ばれる公認ラベル」(p.108)、「第三世界に寄付する服を入れるハートマークの付いたコンテナ」(p.109)、黒、赤、黄色によって出来たドイツの国旗に「環境保護を目指す党の緑色」(p.115)の欠けたこと、「無農薬野菜」(p.136)に高い関心を寄せている。ノラの関心がまさに「SDGs3:すべての人に健康と福祉を」、「SDGs12:つくる責任つかう責任」の目標に向けている。また、ナヌークの目から見れば、ノラが「宝石を採掘した労働者の労働条件が人間的なものであったという証明書が付いていない限り、宝石なんか買いませんよ」(p.190)し、「珊瑚と同じで、自然破壊の一例ですね。自然はお金儲けのために切り売りされるべきではありません」(p.190)と主張した環境保護の信念を実践するタイプの女性である。このノラが初対面の船長ヴィトルドには「しっかりした女性」(p.89)、アカッシュには「飾り気のない、さっぱりした、理性的な女性」(p.91)、ナヌークには「決して運命を受け入れずに理性的闘い続けるだろう」(p.161)に見える通りである。

2. 環境保護論に落とし穴のある部分への指摘

一方、前述の環境保護者のノラの「不法な琥珀採取」[25]に対して、「家族を養うために仕方なく逮捕される危険を冒してまで作業しているんです」(pp.190-191)と教師のセルゲイが弁護した。この対話からは、環境保護と生活の両立が時には難しい状況にあると分かる。また、セルゲイの弁護を聞いたナヌークが、「自分の属する社会の人間が外国人の目に悪く見えるのが苦痛なんだろうか」(p.191)と、故郷を愛する観点からの見解もあると示唆している。

また、一見先進国の車を発展途上国で再利用してもらう好意に基づくリサイクリングだが、その落とし穴も作品中鋭く指摘されている。アカッシュが「廃車をアフリカに押しつける。アフリカには廃車をばらして、使える部品だけから自動車を組み立てる技術を持つ人たちがいる。それはリサイクリングだから喜ぶべきだ、と思うか

[25] ここからは、「SDGs15:陸の豊かさを守ろう」と相通ずることがあると思われよう。

臺灣大學學術期刊資料庫

もしれない。しかしそうやって造られた車は、ものすごく排気ガスを吐き出す。その結果、住民は病気になる。一度でもナイロビの道路で呼吸した経験がある人なら、僕の言うことがすぐに理解できるはずだ」（p.97）と言ったように、地球に優しくするためのリサイクリングが称賛されるべきだが、先進国から発展途上国に持ってきた廃車から使える部品を取り外して再利用すると、かえって発展途上国の住民の健康や地域の発展に大きなダメージを与えることになるから、環境保護論に落とし穴・盲点があることが警告されている。この点からは、「SDGs1：貧困をなくそう」、「SDGs2:飢餓をゼロに」、「SDGs3：すべての人に健康と福祉を」、「SDGs8：働きがいも経済成長も」、「SDGs9：産業と技術革新の基盤をつくろう」、「SDGs10：人や国の不平等をなくそう」、「SDGs12：つくる責任つかう責任」の諸問題が再び提起され、注意が呼掛けられように感じられる。

（四）ジェンダーの平等を実現する願望

第 1 作から「性的引っ越し」[26]する人物として登場しているアカッシュ[27]が Hiruko には「英語は着慣れた服の柔らかくなった布のようにしなやかに身体の動きに寄り添う」（p.16）、ナヌークには「その日その日の光の中で柔らかく輝くだけで悲運も幸運も天候のように受け入れてしまいそう」（p.161）な人物に見える。このアカッシュが、表には健康で裏には性を生産機械にさせるナチスの政策について、「健康という言葉にもいろいろ意味がある。恐らくナチスは、男全員を精子生産機械、女全員を妊娠機械にしたかったんじゃないかな。それが彼らにとっての健康ということだった。戦争をすれば人口がどんどん減ってしまうから、それを補うために余計に生産しようとした」（p.84）と Hiruko に説明した。その後、「性のアインシ

[26] 曾秋桂（2020）「グローバル時代のエコフェミニズムの視点から読む多和田葉子『地球にちりばめられて』—国境無き新しい夢を育むことへの示唆—」『台大日本語文研究』三十九期 pp.27-48 台湾大學日本語文學系

[27] 多和田葉子・小澤英実（2023）「歴史の詰まった海、喚起された記憶『太陽諸島』多和田葉子インタビュー」『群像』78 巻 p.116 講談社では、アカッシュの人物造形について、多和田葉子が「インドの現実を見ているし、ジェンダーの問題についても深く考えているので、また立場が少し違います」と説明している。

ュタイン」[28]と呼ばれたヒルシュフェルトのことを、「もしそのままドイツ国内に留まっていたらヒルシュフェルトはナチスに殺されていたと思う。（中略）世界を旅すれば、いろいろな性のかたちに直接ふれることができる」（p.85）と付け加えた。アカッシュの発言を聞いた船長ヴィトルドが、「生産機械はいけませんなあ。女も男もそれ以外の性も、みんな輝かしいポルノグラフィアであってほしい」（pp.84-85）と口にした。男女以外の第三性も「輝かしいポルノグラフィアであってほしい」と船長ヴィトルドの願望は、正に「SDGs5：ジェンダー平等を実現しよう」の目標が掲げられた通り、地球上の人類では男女以外に事実上存在している第三性が平等に扱われ、尊重されるべきことであろう。

（五）被害妄想を抱いた Susanoo の自己再認識—海の資源を保護—

Hiruko には、「神話の登場人物のように遠い。黙っているかと思うと、唐突に巨大な怒りを爆発させる」（p.31）と見える同じ国の人の Susanoo が、ノラと「妬みと怨恨」について話した時に立ち寄ったナヌークに、「それは古い神話の中の話だ。姉のアマテラスは確か天空を治めるように言われて、一方、弟のスサノオは夜とか海とかを治めるよう言われたのさ」（p.293）と揶揄された。ノラがすぐその場で「だって、それは外務大臣と環境大臣を兼ねるみたいなものでしょう。工業廃棄物が海の底に積もって、それが新しい竜宮城になっている（中略）おまけに石油タンカーや軍艦が時々沈没して、水を汚す。海をどうにかしなければ地球は壊れてしまう。そんな重い課題があなたに与えられたということになるでしょう?」（p.293-294）と Susanoo を慰めてあげた。それを聞いた Susanoo は、「頬を叩かれて目が覚めたような気がした。これまで、めそめそ泣いたり、すねて黙り込んだり、からいばりしたりして生きてきたが、オレに海が割り当てられたのは、両親に愛されていなかったからではなく、その逆なんだ。海が壊れたら、もう地球に生命はない。せっかく太陽

[28] https://news.yahoo.co.jp/articles/2e5470723b18c998f4e63c7d2e3f5fcdc8166b13?page=1（2022 年 10 月 1 日閲覧）

臺灣大學學術期刊資料庫

が照っていても、その熱に焼かれてすべてが乾涸びてしまう」（p.294）と悟り、自分のすべき役目を見つけた。実は、太陽と海（水）との大事な関係は、クヌートと Hiruko との応答からも分かる。クヌートの質問に「八岐大蛇はドラゴンではない。水を司る神。水は、一番大切で一番清潔な地下資源。石炭や石油がなくても、水があれば人は生きていける」（p.280）と Hiruko 答えたら、「水だけでは寒いだろう」（p.280）と心配しそうになったクヌートに、「太陽が暖めてくれる」（p.280）と再び説明した。このような一連の会話を見ても明瞭なように、「SDGs7：エネルギーをみんなに そしてクリーンに」、「SDGs14：海の豊かさを守ろう」の目標が一層顕著化される。

以上、『太陽諸島』に描かれた「バルト海航路を選んだことの意味」、「書名『太陽諸島』の意味」、「環境保護論とその落とし穴」、「ジェンダーの平等を実現する願望」、「被害妄想を抱いた Susanoo の自己再認識」の 5 点の事象を考察した結果、いずれも文学作品に SDGs の目標を反映させた具象化として認められよう。

四、おわりに―SDGsを包括している『太陽諸島』の持つ文学の力―

「誰一人取り残さない」社会を実現させる信念に基づき、日本文学研究が貢献しうるかとの思いからスタートした本論文だが、行ってきた考察結果を巨視的に下記の三点に纏めることができる。

まずは、バルト海航路を選んだことに「元の自分に戻る」というメッセージが隠されていることである。国籍、人種、文化、地域、使用言語が違っても、何をしても「初心に忘るべからず」ことの意味を再度考えさせられる。次は、書名『太陽諸島』からは、島にせよ、大陸にせよ、太陽が照らす地球の至る所を一つのまとまりに統合することである。要するに、21世紀の世界的市民としては、地球がただ一つだという意識を共通に持つべきであう。最後は、『太陽諸島』に描かれた環境保護の議題からは、SDGsの17ゴールのうち、「SDGs13：気候変動に具体的な対策を」以外の16ゴールのすべてが『太陽諸島』に色濃く描写されていると分かった。このように、日

臺灣大學學術期刊資料庫

本文学研究を通して明らかににした、持続可能[29]なSDGsの目標が文学作品に盛り込まれた特色を見ると、多和田葉子がSDGsの課題を日本文学のジャンルを通して世界へと発信しえた、名実共な世界的作家だと言えよう。

要するに、本論文で考察して得た啓発からは、サステナビリティの文学の力に寄与すべきことが示唆されているのである。それは日本文学作品、文学研究が確かにこういった形を通して、社会的な営み、囲まれた周りの生活環境と関わり合い、グローバル社会にも大変貢献するように、文学が不生不滅の力を持っているからであろう。

【付記】本論文は 111 年度科技部研究計画案（MOST 111-2410-H-032-058 MY2）による研究成果の一部分である。

【テキスト】

多和田葉子（2018）『地球にちりばめられて』講談社
多和田葉子（2020）『星に仄めかされて』講談社
多和田葉子（2022）『太陽諸島』講談社

【参考文献】

【書籍・論文】

曾秋桂（2020）「グローバル時代のエコフェミニズムの視点から読む多和田葉子『地球にちりばめられて』—国境無き新しい夢を育むことへの示唆—」『台大日本語文研究』三十九期 pp.27-48 台湾大學日本語文學系
曾秋桂（2021）「エコフェミニズムの視点から読む多和田葉子の『星に仄めかされて』—「神の子どもたちはみんな踊る」の意味をめ

[29] 多和田葉子・小澤英実（2023）「歴史の詰まった海、喚起された記憶『太陽諸島』多和田葉子インタビュー」『群像』78 巻 p.115 講談社では、小澤英実が言うには、「本作（『太陽諸島』のこと、論者注）では（中略）なかでも持続可能な社会に意識的なノラの意見はやはり強くて（後略）」と、『太陽諸島』には持続可能の意味合いが込められている。

ぐって―」『台大日本語文研究』四十一期 pp.21-40 台湾大學日本語文學系
多和田葉子・野崎歓（2022）「群像創刊 75 周年特別対談地球にちりばめられた私たち」『群像』77 巻 pp.172-185 講談社
多和田葉子・小澤英実（2022）「多和田葉子離れていても、孤独ではない人間たちの闘争」『群像』76 巻 pp.177-191 講談社
谷口幸代（2022）「多和田葉子前作品解題」『群像』76 巻 pp.204-221 講談社
松永美恵(2023)「書評「国境なき船旅、幻の故郷と饒舌な旅人たち」」『群像』78 巻 pp.118-123 講談社
多和田葉子・小澤英実（2023）「多和田葉子歴史の詰まった海、喚起された記憶『太陽諸島』多和田葉子インタビュー」『群像』78 巻 pp.104-117 講談社
岩川ありさ（2023）「多和田葉子「太陽諸島」聴かれなかった歴史」『文學界』1 月号 pp.310-311 文藝秋春

【ネット資料】

https://imacocollabo.or.jp/about-sdgs/（2022年10月1日閲覧）
https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sdgs/pdf/konkyo.pdf（2022年10月1日閲覧）
https://miraimedia.asahi.com/sdgs-description/（2022年10月1日閲覧）
https://imacocollabo.or.jp/about-sdgs/17goals/（2022年10月1日閲覧）
https://miraimedia.asahi.com/sdgs-description/（2022年10月1日閲覧）
「多和田葉子氏インタビュー沼のなかから咲く蓮の花のように」
https://dokushojin.com/article.html?i=3319&p=3（2021年1月15日閲覧）
https://www.bookbang.jp/review/article/633645（2020年10月10日閲覧）
https://www.weblio.jp/content/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E3%81%AE%E5%9B%BD%E6%97%97（2022年10月1日閲覧）
https://news.yahoo.co.jp/articles/2e5470723b18c998f4e63c7d2e3f5fcdc8166b13?page=1（2022 年 10 月 1 日閲覧）

臺灣大學學術期刊資料庫